©2022 YHAL, YITP, Kyoto University
京都大学基礎物理学研究所　湯川記念館史料室

京都新聞　昭和49年11月18日　月曜日

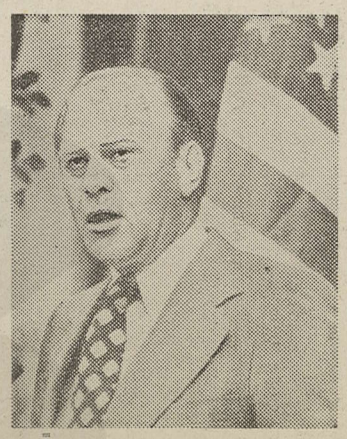
率直で飾らぬ人柄

――訪日するフォード米大統領

庶民的アメリカ人

スポーツマンで愛妻家

米中西部のミシガン州グランドラピッズ選出の下院議員を二十五年間務めてきたジェラルド・フォード氏(ニ)が、米国の最高権力の座につくことは、米国民も、そして〝ジェリー〟の愛称で呼ばれる本人も、一年前までは考えもしなかった。汚職容疑で辞任したアグニュー前副大統領の後任として昨年十二月、共和党下院院内総務から副大統領に就任、さらにことし八月、ウォーターゲート事件でニクソン前大統領が辞任したあと、大統領に昇格―米国の政治の激変とともに、フォード氏の人生は大きく変わった。だが、フォード氏の人柄まで変わったわけではない。率直で、飾り気なく、大学時代はフットボール、いまは水泳とスキーに熱中するスポーツマンであり、信仰深く、愛妻家のフォード氏は自他ともに認める〝庶民的アメリカ人〟である。



前任者のニクソン氏が外交好きで、大統領になる前から外遊に飛び回っていたのと対照的に、フォード氏は昨年まで、下院議員としての国内政治の駆け引きのなかで生きてきた。外交の経験はほとんどない。日本に関しても、下院議員時代のアジア訪問の途中、東京に二回立ち寄ったことがあるだけで日本の指導者と広範囲に会い、旅行をするのは初めてである。

率直な人柄、内政面の手腕を政治的なよりどころにしていたフォード大統領だが、世論に先行してニクソン氏に全面特赦を与えインフレ対策確立に決め手を欠くなど、内政面での立場は楽ではない。それだけに、今度の大旅行の成果は、国内政治面でのフォード氏の立場強化にも重要な意義を持っている。

フォード大統領の家族は、若いころモデルをしていたという美しいエリザベス夫人(ベ)との間に三男一女。長男マイケル君(三)はボストン神学校、二男ジョン君(三)はユタ州立大学にそれぞれ在学中で、三男スチーブン君(一)とはユタの牧場で働いている。長女スーザンさん(一)もはいま高校生。エリザベス夫人は訪日を楽しみにしていたが、乳ガン手術のあとのためウラジオストクまで足をのばす今度の強行軍の旅行には同行しないことになり、フォード大統領だけの単身訪問となった。(ワシントン鍋島共同特派員)

「ありがとう。どうもありがとう」というのが、地方遊説で聴衆の歓呼にこたえるときの口癖だが、この人がいうとき、決して大げさではなく、話に耳を傾けてくれる人たちへの感謝の念が自然な響きをもって伝わる。そして、四十年前、フットボールのセンターとして活躍していたミシガン州立大のチームが、その土地の大学との試合で何対何で負けたかを披露して、地元の人たちを喜ばせる。

愛妻家のフォード氏は下院議員時代、永年神経痛に悩むエリザベス夫人(愛称はベティ)に、七六年の改選期には再出馬せず、引退すると約束したことさえあるのはよく知られている。

だが、大統領という最高の座についたあと、心境は変わったようにみえる。エリザベス夫人の乳ガン摘出手術、中間選挙での与党共和党の大敗、インフレと景気後退という困難な状況に直面して、七六年の大統領選挙には出馬しないで、本当に引退するのではないかとの観測をきっぱり否定、再選を目指す意欲を燃やしている。

仏であすゼネスト

政府は強行突破の構え

【パリ十七日伊藤共同特派員】花の都、パリの並木通りは、このところゴミだらけ。枯れ葉も街路に積もるばかりだ。パリの清掃労働者が賃上げなどの要求で十三日からストに入っているからだ。

パリの一郵便局の山ネコストから始まった郵便ストもすでに一カ月。そのうえ十九日には労働総同盟(CGT)民主労働総同盟(CFDT)教職員組合(FEN)の三大労組連合が二十四時間ストを予定、政府対労組の対決は一段と激化の様相を示している。十九日のゼネストは、郵便労働者への支援を含めた諸要求を掲げたもので、国鉄、電力、ガス、地下鉄、タクシーを含む都市交通、銀行、学校、港湾などの業務が大幅にストップしてうな気配だ。

ジスカールデスタン大統領は「緊急課題のインフレ抑制のために経済政策は変えない」と、労働攻勢に真っ向から立ち向かう姿勢のようだ。すでにシラク首相、ボニアトウス主内相は、今回の労働攻勢が経済要求のワクを超えて政治スト化していると繰り返し非難し、仏経団連も郵便ストの長期化が経済を混乱させ、失業者の増加を招いていると批判している。

十四日夜には、ボニアトウス主内相じきじきの命令で、パリ市内の主要郵便局に多数の警官隊が導入され、労組側のピケを排除するという事態も起こった。CGT、CFDTなど労組側はこれに反発して十五日夕、パリで五万人(警察発表では二万人)の大デモ行進を行い、十九日のゼネストの前景気を盛り上げた。

政府側は郵便ストがさらに続くなら、軍隊を動員して郵便配達をする方針で、パリの清掃ストも衛生的見地から放置できないと、これにも軍隊の動員をちらつかせるなど、いまの段階では交渉より力の立場で強行突破を図る気配をみせている。

新素粒子を発見

新しい特性もつ

原子物理の空白埋める？

米スタンフォード大など

【スタンフォード(米カリフォルニア州)十六日AP=共同】米スタンフォード大学は十六日、これまで知られていなかった新しい素粒子が、同大学の線型加速器センターとニューヨークのブルックヘブン国立研究所でこのほぼほぼ同時に発見されたと発表した。スタンフォード大学のバートン・リクター教授とブルックヘブン国立研究所のサムエル・C・C・ティン教授は、この日の共同記者会見で「この新素粒子は、われわれが知っている素粒子とは違ったもので、新しい構造を持っていると思う。どのような特性があるのか全く知られていない素粒子が突然発見されたことは、非常に興奮させられる出来事だ」と述べた。

この発表によると、この新素粒子については理論的にも解明されておらず、現在、理論物理学者たちが、これまでの素粒子論のワクのなかでとらえられるかどうか懸命に研究している最中で、これまでの原子物理学理論の空白を埋めるものと期待されている。

この新素粒子は、これまでで最高のエネルギー出力を持つ電子加速器により、電子とその反粒子である陽電子とをぶつける実験をしているうちに発見された。スタンフォード大学の研究では、電子が陽電子にぶつかるときに、重い素粒子が顕著に増加する現象がみられたという。

新素粒子のエネルギーは三十億電子ボルトを少し超える程度で、この素粒子は一秒の一兆分の一のまた一億分の一という短い時間のうちに崩壊して「ハドロン」(重粒子)や「レプトン」(軽粒子)と呼ばれる素粒子になってしまう。だがこの素粒子の寿命は、大きな質量を持つ素粒子にしては予想以上に長いものである。

こうした現象は、この素粒子がまだ知られていない新しい特性を持っていることを示唆すると考えられている。また今度の発見は、別々の研究所で別々のスタッフが異なった技術で同じ現象を確認しているため、極めて信頼性が高いものとみられている。

素粒子は、あらゆる物質とエネルギーを構成している最小の粒子で、陽子、中性子、電子とともに原子を構成している。

今度の新素粒子を発見したスタンフォード大学のスタッフは、バートン・リクター教授、ロイ・F・シェウィッター教授、ルドルフ・R・ラーセン博士(以上スタンフォード大学)のほかローレンス・バークレー研究所のウィリアム・チノウスキー教授、ガーソン・ゴールドハバー教授、ジョージ・H・トリリング教授で、ブルックヘブン研究所のスタッフはティン教授のほかY・Y・リー博士およびマサチューセッツ工科大学のU・J・ベッカー博士、ミン・エン博士らの教授が含まれている。

イタリアでも確認

【ローマ十六日ロイター=共同】イタリアのフラスカッチ国立研究所は十六日、同研究所の電子加速器で、新しい素粒子の存在を確認、その跡の写真撮影に成功したと発表した。

統一理論に手掛かり

解説

これまでも新しい素粒子が次々に発見されてきたが、今度の米スタンフォード、ブルックヘブンおよびイタリアのフラスカッチでの発見は、これまで知られているものとは大きく違った性質の素粒子であり、従来のさまざまに入り乱れた素粒子理論を統一的に説明できる新しい理論誕生の手掛かりになるかもしれないとして、わが国の素粒子論学者も極めて高く評価している。

電子と陽電子(プラスの電荷を持つ電子)を高速で衝突させて新しい粒子を生み出す実験は各国の加速器で行われているが、スタンフォード大学の長さ三千二百メートルの線型加速器での実験が最も注目されていた。ことし六月と七月にイタリアとイギリスで行われた高エネルギー物理学に関する二つの国際会議に出席した中村誠太郎日大教授によると、既にスタンフォード大の加速器で発生した粒子の数やエネルギーの分布が従来の知識では片付けられないことが報告されていた。

今回の発見は、その後、同加速器での実験をさらに進めて確認したもので、ブルックヘブンでも同様の結果が出たことは、数日前、中村教授のところへも電報で連絡があったという。新粒子についてまだ命名はされていないが、中村教授によると、中性の弱い相互作用をもつ中間子の一種であり、陽子の約三倍のエネルギーがあり、寿命が常識的に考えられているより百倍も長いことから、全く新しい型の素粒子を想定しなければならないという。そして、このところ停滞気味の素粒子論が、こうした実験のもたらす成果を手掛かりにして、再び動乱と飛躍の時代に入るのではないかと同教授は語っている。